

横須賀市吉井城山第一貝塚の人骨

鈴 木 尚

本貝塚は昭和三十五年十月より三十六年三月までの六カ月間を費して、横須賀市博物館（赤星直忠氏担当）が横須賀考古学会の援助のもとに発掘されたものであるが、その結果茅山上層式の文化遺物とともに、二十数片の人骨が発見された。これらの人骨は、同貝塚貝層の各部分から獣骨と全く同じ状態で、破片となって発見され、一体として埋葬されたと思われるものはなかったという。これらの人骨は一括して筆者に送付されたので、以下に、その所見を述べる。

頭骨

第一号 赤星氏調査のH3区から発掘された。脳頭骨と顔面頭骨があるが、欠損部が多いので完形に復原することはできない。なお下顎は失われているが、骨の細い性質を考慮するとき、I3がその可能性が高いようである。本頭骨は女性と推定され、保有されている範囲の矢状縫合と冠状縫合は開放し、歯の咬耗も甚だ微弱であるから、年令の若い個体と推定される。

前頭骨はよく膨隆し、女性に特有ないわゆる *Weibeskinn* の形で、前頭結節も著しい。一部残存する眉間の形から見ると、比較的よく隆起するが、この時代の男性としては弱い。

側頭線は、前頭部によく認められるが、現代人には見られぬほど発達がよい。

上顎骨はほぼ完全に残っているが、歯槽突起は比較的到低く、従って口蓋も浅い。

歯は右では第二、左では第一大臼歯が保存されているが、咬耗の程度は微弱である。

下顎骨

第二号 C0—C1から発掘された。成人の女性で、左側半部の骨片で、第二大臼歯を除いて、齒槽はすべて解放するが、健全で、齒槽濃漏の跡を認めない。

正面観に於いて、頤三角は明らかで、頤隆起の発達は著しく強い。切歯下圧痕は深く、したがって齒槽性突顎は高度である。外側結節 (Tuberculum laterale) はほとんど欠除するほど弱い。

斜線の下端は膨隆して外側隆起 (Prominentia lateralis) をなしているが、齒槽縁と下顎体の下縁に沿って、上外側隆起 (Torus lateralis superior) と縁隆起 (Torus marginalis) が派出され、両者の間に隆起間溝 (Sulcus intertoralis) があるが、これらの構造は現代人では通常見られないところで、先史時代の頑丈な下顎に見られるところである。

下顎枝では咬筋窩は深く、前記の外側隆起によって、前方から境されている。この面には下顎角より前上方に向って、数条の線状隆起が認められるが、この面全体が深いこと共に、咬筋の強力であったことを思わせる。

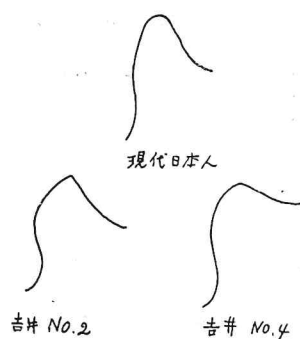
下顎枝突起は大きく、その前縁は半円形をなしている。このような形は現代人には見られないところで、F・ワイデンライヒのh型またはi型に属している。この両型とも北京人類のG1とH1に見られたところで、わが縄文時代人においても稀に出現する (図参照)。

内面に於いて、下顎枝には内関節髁と内鳥喙稜 (Crista endocondyloidea, C. endocondyloidea) は現代人には全く見られないほど強く発達し、したがって両者の合流的に見られる三角隆起 (Torus triangularis) もまた甚だ強い。

下顎角の内翼状筋野および前記三角隆起にはじまる頤舌骨筋稜の発達も甚だ良好である。

歯は第二大臼歯だけが、齒槽に保存されていた。この歯のエナメル質は平に咬耗され、その下に齒骨を透視することができる (咬耗度はブローカ氏第一度)。なお第三大臼歯はなく、齒槽は開放しているが、漏斗状に縮小するところから、齒根は一本に融合していたものと思われる。

第三号 E3区から発掘された。本骨片は成人、女性下顎と推定される。右側の下顎枝を除く右側半で、第一大臼歯を除いて齒槽は総て開放する。本骨片の最も特異とするところは、その大きさが著しく小形であることに存する。それは次表によって理解されるであらう。



吉井貝塚人骨の下顎骨筋突起模型

	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6
下顎骨底において 正中点 (gn) ~ 咬筋窩前縁	52	49	53	(52)	—
咬筋窩前縁 ~ 頤孔前縁	30	26	右 ³⁰ 左 ³⁰	29	37

それにもかかわらず外側隆起が強く、上外側隆起、縁隆起、隆起間溝が認められ、しかも咬筋窩が甚だ深いことは No. 2 骨片よりも寧ろ強いくらいであろう。このことは C 下顎で認められないほどの前縁結節 (*Tuberculum marginale anterio-*
re) が甚だ強く、外側結節 (*T. laterale*) もまた強く、両者は浅い溝で分離されていることは特筆すべきである。

頤窩によって境される頤三角も認められるが、頤隆起は余り高くないようである。

内面において下顎舌骨縁がよく発達するが、下顎隆起はない。

唯一の歯である第一大臼歯は、正常の大きさをもち、咬面には咬頭に一致して歯骨が露出している (ブローカ第二度)。開放する第二大臼歯の歯槽の形もまた正常の大きさである。ここで興味のあることは、下顎が小形であるのに一致して、開放する歯槽が甚だ小形である。とくに犬歯のそれもやはり小さいことは、本下顎の小形化は、主として前歯の縮小と関係が深いように思われる。

第四号 本骨片は I3 区から発掘された。成年の女性下顎骨である。右半部の下顎枝が欠除するほかは、ほぼ完全である。歯は左第一大臼歯を除き、死後、脱落している。この歯の咬耗は咬頭に相当して、極く小形の歯骨露出があるだけであるから、弱いといわなければならない。また齲歯など病的な所見はない。

外側隆起は強いが、上外側隆起と隆起間溝はない。咬筋野は深く、窩状をなし、筋突起は低く巾が広い I 型に属している。

関節突起は欠損しているので、下顎切痕の形は正確にはわからないが、深いものとは考えられない。

内面において、下顎舌骨筋縁と三角隆起とは連続する高い稜を形成し、その先は筋突起、関節突起に分かれて終わる。なお軽度ではあるが右第一大臼歯に相当して下顎隆起がある。

第五号 J4 区から発掘された。成年の男性下顎骨とみなされる。右半部を占める骨片であるが、枝の大部分は欠除する。

すべての歯は死後脱落し、歯槽は開放する。

本下顎を最も特徴づけるものは、咬筋窩が甚だ深いことで、その前端は、恰も軟い粘土を拇指の腹で圧痕をつけたときにように、明瞭な輪郭をもって外側隆起と境される。このために下顎底部の厚さは、骨体では 12 ~ 13 mm であるのに対して、枝部では 5 mm に減少している。

第六号・第七号 ともに下部貝層より出土した下顎骨として、同じ整理袋に入れられていた。両骨片は、それぞれ右または左半部に属しているが、互に接着はしない。しかし、細い点に至るまで形態的特徴が一致するので、同一個体として認めて差支えないものと思われる。

右半骨片では大臼歯齒槽を除いて齒槽突起は欠除するが、左半では第三大臼歯に齒が保存されているほかは、すべて齒槽は開放する。両骨片で共通し、しかも他の骨に比して著しい点は第五号骨片と同様に外側隆起が強く、咬筋窩が深いことであるが、さらに内面において、舌下腺窩が指頭を隠すほど深いこと、および第一大臼歯および両小臼歯部に相当して軽度ながら下顎隆起がみとめられることである。

保存される左第三大臼歯は前傾し、咬面には局部的に齒骨の露出がある。

上腕骨

上 腕 骨				
Martin, 1928		No. 8 (女)	No. 9 (男)	No. 10(女)
1	最 大 長	(250)	—	—
2	全 長			
5	中央最大径	21	23	18
6	中央最小径	16	16	14
	6 : 5	76.2	69.6	77.8
6 b	中央 横 径	20	22	18
6 c	中央矢状径	19	18	16
7 a	中央 周 径	61	62	55
7	最 小 周 径	59	—	—
	7 : 1	(23.6)	—	—

第八号 C4区から発見された。成人女性の右上腕骨と推定される。上・下両骨端を欠き、ほぼ骨幹部に相当する182 mmの骨片であるが、筆者の上腕骨復原法によって算出される最大長は250 mmである。

骨片の全面は風化がかなり進行しているが、その形質を詳にするには差支えない。三角筋粗面は縄文人としても、それほど著しいとはいえない。従って、その下端から外側縁に沿って走る橈骨神経溝の発達も、それほどよくない。しかし、粗面の内側縁からはじまる上腕骨内側面は現代人と違い、むしろ凹弯するほどである。

第九号 E3区から発掘された。成人男性の左上腕骨であるが、破損のため、幹骨の中央二分の一が保存されているに過ぎない。したがって、全身を復原することは避けた。しかしC4骨片よりは大形と推測される。

三角筋粗面の発達は顕著で、C4を遙かに凌駕し、したがって橈骨神経溝は甚だしく深い。骨片の内側面は凹弯することC4と同様である。三角筋粗面の中央における横断面は左右から圧平されたような形である。

要するに本上腕骨の形は、付着する筋の発達が強力であったことを示している。

第一〇号 下部貝層から発見されたもので、成人女性の左上腕骨片である。

大 腿 骨

Martin, 1928	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16
1 最 大 長	—	(392)	(364)	—	—
6 体中央矢状径	—	27	26	26	27
7 体中央横径	—	24	22	25	25
6 : 7	—	112.4	118.1	103.9	107.9
8 体中央周径	—	80	75	80	81
8 : 1	—	(20.4)	(20.4)	—	—
9 体上横径	28	29	27	—	—
10 体上矢状径	23	23	23	—	—
10 : 9	82.3	79.3	86.0	—	—

骨は骨幹の下二分の一を占める78 mmの骨片であるから、その最大長を推測することは避けるが、本骨片を最も特徴づけることは、疑もなくその形が小さいことである。このことは別表計測値からも推測されるところで、多分、その全長は230 mmまたはそれ以下とさえ思われる。しかし骨片の上端断面の形はローマ字のD字形で、やはり左右から圧平された形で、他の上腕骨と共通の形態を示していたと思われる。

尺骨

第一一号 本骨片はC3区から二本発掘されている。ともに下位の三分の一を欠く左側の骨片で、男性と見なされる。

これらの骨片は、共通して骨間櫛がよく発達し、最大径が骨の前後の方向にある、いわゆる真性扁平尺骨（長谷部）であり、筋付着のための粗面の発達が甚だよいのは、筋の発達がよかったことを示している。

大腿骨

第二二号 本骨片はB5区から発見された。左側大腿骨骨幹の近位三分の一からなる骨片で、成人の男性骨と推定される。保存される骨片の長さは125 mmであるから、その全長を推測することは不可能であるが、遠位端の断面の形から、本貝塚男性大腿骨の中では最も柱状性が強いものと思われる。

第三号 H3区から発見された。成人の男性骨と考えられる。上下両端を欠き、ほぼ骨幹部が保存された長さ281 mmの骨片で、復原された最大長は192 mmと推定される。

本骨片においては、大腿骨稜は、現代人よりよく発達し、いわゆる柱状大腿骨をなしている。

第四号 J4区から発見され、成人の女性大腿骨と見なされる。

上下両骨端を欠く長さ293 mmの骨片であって、復原された最大長は364 mmと推定され、したがって短小といふことができる。しかも計測値で明らかのように、骨幹の太さはむしろ細い。それにもかかわらず、大腿骨稜の発達は著しく、前記の男性骨よりも強い。したがって強い柱状性を示し、ここに付着する四頭股筋が甚だよく発達していたことを物語っている。

第一五号 L4区から発掘されたが、成人の男性骨下半だけが保存される長さ127 mmの骨片である。骨の表面には契齒類の歯形が多数認められる。

大腿骨稜の發達は現代人より強く、中等度の柱狀性を示している。

第一六号 下部貝層から散在して發掘されたものである。

左大腿骨の骨幹中央部を占める 102 mm の短い骨片である。外側面は内側面に比して著しく凹むほか、大腿骨稜は高く、したがって柱狀性は強い。

脛骨

第一七号—第二三号 下部貝層から散在して發見された總數七本の骨片である。これらはどれも破片であるので、計測にたえない。しかし少なくともそのうちの二本は別の個体の男性であり、三本は、やはり別個体の女性、一本は性不明、残る一本は若年の個体のものと推定される。

これらの骨片を通覧すると、現代人と異なる共通した特徴がある。その第一は、どれも左右に扁平であって、いわゆる扁平脛骨の範疇に属している。この扁平性は、脛骨後面に鋭い稜が發達することに由来するもので、そのために骨の前後径が現代人に比して、増加していることに基づいている。

第二の点は、脛骨の前縁すなわち前稜 (*Crista anterior*) が現代人のように鋭利でなく、丸味をもっていることである。この後稜發達にもとづく扁平性と、前縁が鈍であることは、ともに縄文時代人のかかなり有力な特徴であって、長谷部言人博士は、下腿筋がよく發達していることにもとづくと解している。

總括 以上において、私は吉井城山貝塚出土の茅山上層式に伴う人骨について所見を述べたが、それを總括すると次の通りになる。

人骨は、どれも破片であって、一体にまとまる骨格はない。その個体数を、最も数の多かった脛骨片から勘案すると、少なくとも七個体が區別されるようである。

次に各骨片から、知ることのできる特徴を通じて、吉井人を復原すると、

一、年令は、いずれも成年と思われ、確実に老年と思われるものがない。このことは偶然のこととも考えられるが、原始的生活をする人々の寿命が短かったことは、古今、東西を通じて正しいことであり、吉井人もまた例外でなかったことを示すものであるかも知れない。私はかつて、同じ横須賀の平坂人が、年令に比して早老であったろうと推論したが、短命の根本は、このようなことに直接の原因があったかも知れない。

二、頭骨において側頭線の發達がよいこと、下顎骨で筋突起の發達がよく、咬筋窩が深く、内翼状筋野の粗面がよく發達することなど、咀嚼筋の發達が著しく良かったと考えられる。

三、下顎枝の内外面にみられる特殊な隆起の発達は、下顎がその関節突起を起点として、挺子の作用をしながら物を噛む際に生ずる強力な力に對して、下顎骨が堪え得るような補強構造と考えることは、レンホセックやワイデンライヒ等が説くところの所見に一致するものである。つまり吉井人は強力な構造の下顎をもっていたということになる。

四、上腕骨・尺骨・大腿骨・胫骨は、すべてそれらに付着する上肢・下肢筋が強力であったと考えられる。

五、上腕骨・大腿骨から、身長を推測すると、男性の第三号人骨は約一五五cm、女性の第八号・第一三号人骨はそれぞれ約一四三cmであつて、現代人より低い、とくに女性なる第一号上腕骨・第三号下顎骨で述べたように、甚しく低いものがあつて、骨片が余りにも短いので、正確には数値を出し得ないが、倭人の範疇に属する身長（男性で一五〇cm以下のもの）があることは興味のあることである。

五、発掘者の赤星氏によると、人骨はすべて貝層中から散在して発見されたものであるが、人骨を詳細に検討すると、大多数の骨の破面は古いもので、発掘中に折れたものでないことが確かめられた。しかもH3頭骨がやや形をなすだけで、四肢骨については、左右対をなすものすら発見できない。すなわち、客観的にみても、骨片は貝層の中に、散在していたことが確かめられそうである。このことは二つの可能性が考えられる。

第一は、貝塚が、急傾斜地にできているので、どこか高所に埋葬された人骨が、二次的に移動し、その時に骨片となつたとする純粋に墓地の立地条件にもとづく可能性である。

第二は食人の風習にもとづくとする可能性である。

ギーセラー氏は世界中の食人資料を集め、発掘される骨の所見を述べている。それによると、骨は骨片で、時に加工または打撃の跡があり、人骨は獸骨と全く同じ状態のもとに混在していることを共通する特徴として挙げている。このことはわが国、縄文時代の食人にもとづく人骨でも同一で、筆者は渥美半島・伊川津貝塚で最も典型的な例を述べたことがある。この見地からすると、人骨が破碎し、獸骨と混在して発見されるのは食人の結果であつたかも知れない。

以上、二つの可能性のどれを選ぶかは、さらに吉井貝塚や関連遺跡の精査をみた後に決めたいと考える。